紹介

遠藤宏著『コレクション日本歌人選　笠女郎』

吉野和子

『コレクション日本歌人選』として編まれているこのシリーズも第四期にはいった。和歌短歌を中心に俳句や民衆の歌も含めて上代から現代まで、一期約二十人ずつを紹介、解説している。『戦国武将の歌』『辞世の歌』といった一冊もある。

日本文学は最古の文学である古事記、万葉集の時代から今日まで一三〇〇年あまり、時代の変化や読み手の要求の変化により、歌物語、歴史物語、日記、説話、随筆、劇文学、小説などさまざまなかたちで生まれ残されてきた。その中で一貫して五七五七七という短い形式を持って現代まで続いている短歌は、日本文学のバックボーンともいえるものであり、世界的にも類がない。それぞれの時代の歌を読むと、歌人個人が浮かび上がってくるだけでなく、その歌人を生んだ時代というものもみえてくる。このシリーズは日本文学をめざす学生に、そして文学を教材としてのみ受け取ってきてしまったおとなたちにも、日本文学を味わう書としてお勧めしたい。一冊一冊、入り込めない巻はそのまま脇に置いて次の巻へ、と、シリーズ全体を是非手にとってみていただきたい。

各歌人、三十首から五十首の歌が選ばれ、解釈されて、巻末には歌人の略歴と作品の簡潔な解説がつけられている。長々とした解説や論ではなく、わかりやすく簡潔なのがありがたい。そして「アンソロジー」とうたっているように、作品を可能なかぎり多く提示してくれているのもうれしい。しかも各歌人、多作な歌人もA5判約一〇〇ページの中に、その膨大な業績を凝縮して見せてくれているのである。

さて本学名誉教授、遠藤宏氏による本書で取り上げられている歌人は万葉集の第三期の終わり、四期の初めに位置する笠女郎である。すでに万葉集歌人として柿本人麻呂、山上憶良、額田王、大伴旅人、大伴家持、高橋虫麻呂、山辺赤人が紹介されているが、笠女郎は万葉集には数少ない女性の歌人であり、最も個性的な歌人のひとりである。全作品あわせてわずか二十九首、題詞と歌以外の他の資料は全くない。本シリーズにおいて一人で一冊を与えられた歌人としては最も作品の数が少ない歌人であろう。しかもサブタイトルにも記されているように、すべて家持ひとりに宛てた恋の歌である。中でも二十四首が巻四に「笠女郎贈大伴宿禰家持歌二十四首」としてまとまって載せられている。一人の作者による歌が連続して並べられているものでは最多である。万葉集のなかでも特異な存在といえるであろう。

著者はこのまとまって載せられている二十四首の歌を時系列順に並べられているとして、恋の始まりから破局まで、女郎の恋のドラマとして一首ずつを丁寧に解説し、展開してみせている。そしてそれぞれの歌の選ばれたことばに暗示される作者の心の浮き沈み、不安、疑い、願いを読み解き、恋の進展具合を類推する。どの歌も家

持に贈った歌であるから家持への訴えであり、問いかけであるのだが、同時に女郎自身の心の奥底への歌いかけとして重層的な構造を明らかにし、比喩のしかけなどを解明して笠女郎の歌の魅力にせまっている。

「家持に冷たく接しられたことが、逆に彼女の熱情を掻き立て、潜んでいた『ことば』が湧き出すように迸って歌になりました。……そして笠女郎は、愛は報われなかったけれど、逆にそのことによって、豊饒の歌の世界を永遠に遺すことになったのです。」と著者は言う。

ピアノの詩人といわれるショパンの曲が全て聞く人を甘美な世界に引き込んでいく強烈な魅力をもつように笠女郎のどの歌もはずれなく読む人を惹きつける魅力にみちており、苦渋・悲哀の中にも甘美な味が漂っていると著者は記している。さてその中でもどの歌がお好きですかと伺ってみたい気もする。

（二〇一九年二月二五日発行　四六判　一一七頁　一三〇〇円＋税　笠間書院）

（よしの・かずこ　平成五年度大学院博士後期課程満期退学）